

LYRICS COLLECTION 4
『フォーシーム』

『僕はやさしいわけじゃない』

これでお別れだ

明日になったら雨が降るから
そのまま忘れてくれないか

清々してるんだ

深夜の道路は海の匂いで
君を考えなくていい

僕はやさしいわけじゃない

すべては君の思い込み
君といっしょにいたくない

僕は自分が好きだから

市川司幸

雨が降ってきた

サービスイアで傘を買ったら
土砂降りになって来やがった

サイドミラーから

君の街は見えなくなった
僕はようやく逃げたんだ

僕はやさしいわけじゃない

君は体をすりつけながら
「やさしいね」って笑うのさ

「やさしいね」って泣いてきたのさ
かな

自分がやさしく見えてくる
やさしい人に見えてくる

僕はやさしくなんかない

ほんとはやさしくなんかない
君もやさしくなんかない

僕は君が大嫌い

僕はやさしいわけじゃない

僕はやさしいわけじゃない
僕はやさしいわけじゃない

君のとなりにいたくない

君の話もききたくない

『カリスマ』

キミは早めに死んだらいいよ

なるべくヒサンに死んだらいいよ

キミの歌が何とも素敵だったから

キミは早めに死んだらいいよ

ボクたちみんな泣いてあげるよ

キミの墓に花束放つてあげるから

カリスマになってよ

ボクらのカリスマになってよ

ダサいロックも まずいポップも

キミが死んだらみんな聴くはずさ

キミが早めに死なないせいで

なんやかんやで生きてるせいで

キミの歌は明日にもゴミになりそうさ

キミが早めに死なないせいで

ファンみんな怒っているよ

キミのサインは何にも売れやしなくなる

カリスマになってよ

ボクらのカリスマになってよ

いっそボクから メダルをあげよう

たぶん今ならまだまだ間に合っさ

キミが早めに死んだ夜から

誰もがカリスマだって呼ぶのさ

キミがヒゲキに死んだ夜から
誰もが夢中になって聴くのさ

キミの歌が何とも素敵だったから？

キミの歌はほんとに素敵だったのか？

『ぼっぴんれいん』

どこかの誰かがよそ見をして

さいだー瓶を落としたせいで

夕暮れ時からみなと街は

ぼっぴんれいんさ

ゴドーとザムザが結託して

めんとす撒いていったというが

それがホントかイナかは置いて

まずは君を助けなくちゃ

交差点を抜けたあとに

窓から落ちた君を救う

そんなときにどしゃぶりの雨

自転車の後ろに乗ってよ

炭酸はもう飲みたくない

拳ひとつも見たくはない

電信柱もビルも溶けて

ばちばち鳴るからうるさいや

ぼっぴんれいんが夜を越えて

僕らも溶かしてしまえそう

あーもー足が動かないな

最後にハグしようよ

はじめていじわる言った公園

はじめて嘘をついたコンビニ

思い出まじりの場所もどこも

ぼっぴんれいんだ

ささいな風すらはじけ飛んで
プリントシャツにも穴が開いた
なのに君はにやにやして
どうしてそんなに楽しそう？

炭酸はもう飲みたくない
砂糖の匂いが甘すぎるんだ
エレキギターも橋も溶けて
夜更けの街へと流れ出た

ぼっぴんれいんが空を包み
僕らも溶かしてしまいそう
あーはー もはや南無三寶
ばいばい、キスしようよ

最初に僕のピアスが溶けて
そのあとに君の寝癖が溶けた
ぼっぴんれいんはざあざあ降って
なんだかおかしくなってきた

自転車タイヤがパンクをして
僕らは車道に投げ出された
ぼっぴんれいんはざあざあ降って
最後にふたりの声が溶けた

炭酸はもう飲みたくない
雫ひとつも見たくはない
電信柱もビルも溶けて

ばちばち鳴るからうるさいや

ぼっぴんれいんが夜を越えて
僕らも溶かしてしまいそう
あーもー足が動かないな
最後にハグしようよ

あーはー 君のキスもすべて
忘れやしないから

『双眸』

目の前に誰かがいて
カップにはココアがあつて
相手が小さい口で話してるあいだ
僕は何も聞いていない
僕は瞳を見つめてる
眼が揺らぐのを見つめてる

たとえば僕が突然
コンパスの針をつまんで
彼の瞳をチクツと刺したら？
僕は何も聞いていない

僕はそれを考えてる
心のうちが暴かれたのなら
嫌われるかな

僕の瞳ももつとちつと見つめて
黒が淀んでいるから
君にはわかつてほしい

何食わぬ顔でケーキを口にして
もしもそうしてくれたら
君がそうしてくれたら
僕は君と友達になれるはず

となりの席に誰かがいて
電車は揺れに揺れて
目の前で二人が手をつないでるあいだ

僕は何も読んでいない
読んでるふりをしてるだけ
手をつなぐのを眺めてる

たとえば僕は爆弾魔

つなぐれた手と手を残して

客車もろとも消して飛ばしたら？

僕は何も読んでいない

僕はそれを考えてる

心のうちが覗かれたのなら

笑われるかな

僕の心をもつとちやんと捉えて

聞みたいなどろどろを

本性と言うんだろう？

平然としてココア飲みほして

もしもそうしてくれたら

君がそうしてくれたら

次は君の本性に触れさせて

「人間の根っこは善だよ」なんて

にやにやしなから言うやつは

悲しい時に抱きしめるための

ぬいぐるみを持たせたやつなんだろう

そいつのことは理解できない

本性は刃こぼれのナイフ

切っ先に触れてほしい

ほんのすこしだけでいい

僕の瞳ももつとちやんと見つめて

黒が淀んでいるから

君にはわかかってほしい

何食わぬ顔でケーキを口に

もしもそうしてくれたら

君がそうしてくれたら

僕は君と友達になれるはず

君だけには「ほんとう」を言えるはず

『心のありか』

たい焼きの中に鯛はいなくて

熱いあんこが顔まで飛んだ

夕暮れの橋のいちばん上で

むしやつきながら おれは気づいた

「ほんとおれ」はどこにもいない

頭の中にもどこにもない

真っ赤な血潮の隅々に

おれの心は散らばってる

どしゃぶりの雨が街にかぶさり

肩まで濡れた 飛び込むように

すべるタイヤでペダルをこいで

おれは笑った ひとりでおれは

「ほんとおれ」はどこにもいない

カラダのどこにもヤツはいない

芯までおれはおれのまま

世界の果てまで行けそうだ

芯までおれはおれのまま

世界の果てまで行けそうだ

『君がラインを消したわけ』

まるで何もなかったように

どしゃ降りはやんで

晴れた朝がた 君はラインを消した

檸檬色の街のどこかにかくれんぼしちゃった

君の本音はついに聞かずじまだった

やがて夜が訪れて人びとはひとりきりに

僕は僕 君は君で街を歩けばいい

言葉はいららない 涙はふかないままで

歩けばいい

僕は君を探しはしない

聞き込みもしない

だけど今日はちよっと街に出たくなった

さみしがりや僕もなんだよ

隠してただけで

汐の響きも何も聞こえない街角

君はラインを消したその訳はわからないよ

君だけが深くうなずけることだから

言葉はいららない 涙はふかないままで

もがけばいい

風の噂で聞いたことでは

生きてはいるらしい

あとは聞かない あとは聞かないでおくよ

もしも君が隠れることに

疲れたのなら

うちにおいでよ、水炊きを作るから

やがて夜が訪れて人びとはひとりきりに

僕は僕 君は君で街を歩けばいい

言葉はいららない 涙はふかないままで

歩けばいい

歩けばいいよ

『後世に伝えたい日本文学』

綺麗な修辭ばかりの言葉は何だか嘘くさい

嘘くさい言葉を書き連ねてきた自分が大嫌いな

ほんとは言いたいことも言えずに誤魔化している

誤魔化していることすら綺麗に誤魔化している

五月雨さらさら 硝子の窓から

原稿用紙をぶちまけた

あの思いが、あの思いそれだけが

リアルだろ

明日になったら小説家なんてやめてやる

言葉は偽善さ、喉を枯らして叫んでやるのさ

明日になるまで今夜はほんとのことを書いてみよう

「僕には何にも解りませんでした。」

最後に悲惨で無残な話で心を震わせる

漢字でページを埋め尽くしたら何だか格がつく

小手先ばかりの技術に時間を割いては笑った

十年間の自分を今では殴りたくなる

陽炎ゆらゆら 夕焼け混じりの

街の景色に泣いていた

あの思いも、あの思いそれすらも

飾ってた

明日になったら小説家なんてやめてやる

本音を言いたい、画用紙みたいに心を言いたい

明日になるまで鏡で自分の顔を見つめていよう

「一体貴方は何者のですか。」

『ランチキ!』

秘密の魔法も使える気がする

お金のために書き始めたのはいつからなんだろう
昔の自分は自分の言葉で書いていたのかな
小説家なんかなるなよ、ぜったい
僕みたいになるなよ

どこかで誰かがひとりりで泣いたとき
地球の裏では誰かが笑った
僕らは街から花火をかき集め
夜明けと一緒に海へと飛ばした

ランチキ騒ぎで空まで行こうよ
今日はなんだか楽しくしたいな
おんぼろジェットでコーラを飲もうよ
燃料切れたらそれはそのときさ

明日になったら小説家なんてやめてやる
言葉は偽善さ、喉を枯らして叫んでやるのさ
明日になるまで今夜はほんとのことを書いてみよう
「僕には何にも解りませんでした。」

太った首相がいびきをかいたから
みんなで監視のカメラを壊した
誰も知らない海辺の校庭で
寝むたくなるまで歌って叫んだ

夜明けの机で最後の最後に書いた言葉は
「僕には自分が解りませんでした。」

ランチキ騒ぎで空まで行こうよ
今日はなんだか楽しくしたいな
おんぼろジェットでコーラを飲もうよ
燃料切れまで笑っていたいな

朝まで誰かとおしゃべりをした
バカげたことからセンチなことまで
コーラのあぶくをなみなみ注いで
酔いが回れば何でも言えるさ

綺麗な言葉が地球を回すなら
僕らはちっとも動かせやしない
それでもほんとの言葉でしゃべりたい
きみの本音も聞かせておくれよ

ランチキ騒ぎで朝までいこうよ
今夜はなんだか気持ちがいいのだ
こんなときには何かが起きるよ

『めくろまじ』

シラケて生きてるわけではないけど
なんだかアヤシイ匂いがあるのだ
華麗に死ぬより命の引き延ばし
セイギに憑かれたやつらに目眩まし

一日ちやつちやか働きメシを食い
時々ステキな何かにハシヤいだり
時々死にたい布団に寝てみたり
同じに見せかけ変わっていく暮らし

なめくじみみたいに馬鹿げた足取りで
キラキラ光った何かが迫るとき
なんだか素肌がピリピリ震えたす
気づいたときには砂でもひと握り

シラケて生きてるわけではないけど
なんだかアヤシイ匂いがあるのだ
革命 天啓 ピンゾロ 成り上がり
ピカピカボダイの悪魔に目眩まし

誰かが下派手なセイギを持ち出して
花火と鼓笛の祭りでおびきよせ
インクでお菓子のお家と小判の箱を描き
普段の暮らしを疑わせる仕組み

そのうちふさふさお髭のオジサンが
大きな袋に機銃を詰め込んで
優しい地声で勇気をかきたてる

僕はこつそり砂でもひと握り

シラケて生きてるわけではないけど
なんだかアブナイ香りがするのだ
華麗に死ぬより命の引き延ばし
セイギに憑かれたやつらに目眩まし

シラケて生きてるわけではないけど
なんだかアヤシイ匂いがあるのだ
革命 天啓 ピンゾロ 成り上がり
ピカピカボダイの悪魔に目眩まし

『魔法のホーキ』

「寂しい」じゃない 「淋しい」じゃない
「さみしい」なんだ 本当なんだ
わかってくれる あなたなら

ブルーのカーテン ブルーのライト
首つり紐を結んだあとの
つめたい気持ち それなんだ

答えは知らない なにも知らない
話を聞いてほしいのなら
今夜は窓に鍵かけないで
魔法のホーキで飛んで行く

ひとりでいるときみじくくせに
みんなでいると苦しいらしい
わかってくれる あなたなら

コピー用紙に万年筆で
死にたい気持ちを吐いたあとから
出てくる寒さ それなんだ

人に会いたい いるだけでいい
右手をつつんでほしいなら
今夜はカーテン締め切らないで
魔法のホーキで飛んで行く

ブルーのカーテン ブルーのライト
首つり紐を結んだあとの

つめたい気持ち それなんだ

それがさみしき

答えは知らない なんにも知らない

話を聞いてほしいのなら

今夜は窓に鍵かけないで

魔法のホーキで飛んで行く

人に会いたい いるだけでいい

右手をつつんでほしいなら

今夜はカーテン締め切らないで

魔法のホーキで飛んで行く

『かな』

キッチンで鍋もフライパンも

昨日の夜中のままあった

ひとりの毛布にふたりで寝て

すこし早くに眼を覚ました

「なんにも覚えてない」なんて

ほんとはすべてを覚えている

ひとりごとつように代わる代わる

自分の弱さを暴いたこと

朝一番の紙ひこうきに

昨夜のなみだを積んでおいた

こころが寒いのはさみしいからさ

窓から夜明けの空のかなた

ふたりはいつでも明るいう方で

ほんとはさみしい魚みたい

そのくせ言葉はうまく出なくて

欠片のままてこぼれおちた

二つの月が重なって

夜空に海が飛んで散った

カーテンの紐を手繰り寄せて

だまってふたりで夜景を見た

あのとき何を思っていたの

昔を思い出したのかな

こころが揺ら揺ら 月夜のせいさ

ふたりはふたりのままのからだ

言葉が魔法をすべて溶かして

すべてが崩れる気がしたことを

今でもはつきり思い出せるの

二時まで寝れない日になると

あの日のふたりはなんにもなくて

こころの底から震えてたけど

いつものふたりじゃなかったはずだ

かなしい部屋を分かち合って

さみしい夜を分かち合って

朝一番の紙ひこうきに

昨夜のなみだを積んでおいた

こころが寒いのはさみしいからさ

窓から夜明けの空のかなた

こころの寒さに裸足で入り

ほんとは知った夜のまなか